

■ テーマ展「井伊直弼—親しき人への手紙—」展示リスト ■

No.	指定	名称	年代	法量 (縦cm×横cm)	内容
分かってほしい 親しい藩士に、自分のことをしっかりと分かってほしい					
1	重文	井伊直弼書状 三浦十左衛門・大鳥居彦六宛	嘉永3年(1850年)10月9日	12.5*74.0	兄で井伊家12代当主の井伊直亮が亡くなった悲しみを述べている。詳細な記述になっており、親しい人には自分のことをしっかりと理解してもらいたい、という気持ちの現れと思われる。
参考	重文	井伊直弼書状案 木俣土佐宛	嘉永3年(1850年)10月6日	12.0*44.5	家老の木俣に宛てた手紙にも直亮が亡くなった悲しみの気持ちは述べられているが、簡潔な記述になっている。
悲しみ 教えを受けていた僧侶が亡くなった悲しみ					
2	重文	井伊直弼書状 撰専宛	天保12年(1841年)5月3日	17.0*160.0	師匠として頼りにしていた清涼寺の師虔和尚が病死し、「闇夜の灯火を失い、盲人の杖無き心地」などと述べている。
落胆と喜び 長野義言との初対面を果たせなかった無念とそれを果たしたときのうれしさ					
3	重文	井伊直弼書状 長野義言宛	天保13年(1842年)7月	17.0*73.0	後に直弼の国学の師となる長野義言とのせつかくの初対面の機会を逃してしまったときの気持ちを「本意なき(残念な)心地がし、そのときの歌をそのままお見せ申します」などと書き送っている。
4	重文	井伊直弼書状 長野義言宛	天保13年(1842年)11月	17.1*235.6	直弼が長野義言と初対面を果たし、3夜続けて語り合えたうれしさを述べる。
不安 兄・直亮の考えがはっきりしない不安					
5	重文	井伊直弼書状 犬塚外記宛	弘化2年(1845年)10月12日	16.6*99.0	井伊直亮に、菊花鑑賞に直弼のもとに立ち寄ってくれるようお願いしたが、いっこうに立ち寄ってくれず、その理由も示されないの、どういふことになっているのかあれこれ考え、不安に思っている。
怒り 藩主・直亮の行動に対する怒り					
6	重文	井伊直弼書状 犬塚外記宛	弘化4年(1847年)10月25日	16.5*38.6	井伊直亮は相州の備場を巡見するとのご意向だが、遊覧のために御出でになるのでは、「不都合千万」「大恥の上の大恥」であるなどと、直亮を批判している。
楽しみ 親しい人の来訪を楽しみにする					
7		井伊直弼書状 三居紫水軒宛	年未詳10月22日	16.0*40.7	謡を聞くので、是非来てほしいと述べている。
8		井伊直弼書状 三居紫水軒宛	年未詳4月2日	17.2*21.6	5日の夕方に早々と来てくれるように頼む。
9		井伊直弼書状 三居紫水軒宛	年月日未詳	16.1*24.6	集まる日限の取り決めを指示する。
敬慕と気後れ 慕っていた撰専に評価された喜びと拙い自分の恥ずかしさ					
10	重文	井伊直弼書状 撰専宛	(天保年中)	16.2*36.5	直弼の従弟で、慕っている福田寺の僧・撰専に「甚だ見苦しく、御前へ出すようなものではないけれど」などと述べながら著書を送っている。
11	重文	井伊直弼書状 撰専宛	天保12年(1841年)1月21日	17.5*149.0	撰専から「ゆくゆくまで仏道を擁護する」ように言われたことは身に余ることだと喜びを述べている。
12	重文	井伊直弼書状 撰専宛	弘化4年(1847年)月末詳25日	17.3*113.7	撰専に頼まれていた額の揮毫が遅れたことを詫言っている。悪筆で心にまかせないと猶予を願っているが、No. 10、11に較べるとあまり卑下しておらず、直弼も成長して自信を持ってきたということではないかと思われる。
嘆き 井伊家江戸上屋敷再建における藩の手際の悪さに対する嘆き					
13	重文	井伊直弼書状 大鳥居彦六宛	嘉永3年(1850年)3月14日	15.5*143.0	江戸の大火で焼失した井伊家江戸上屋敷の再建が不手際で、非常に外聞が悪いことであるが、いかんともしがたく、「心易」い大鳥居にこのことを書き送っている。

No.	指定	名称	年代	法量 (縦cm×横cm)	内容
14	重文	井伊直弼書状 三浦十左衛門宛	嘉永3年(1850年)6月28日	15.8*132.0	今のやり方の上屋敷の再建では出来もひどいであろうから、それならば直弼に代替わりするまで延引してほしい、と述べている。
心配					親しい藩士の病気を心配する
15	重文	井伊直弼書状 安東七郎右衛門宛	嘉永2年(1849年)2月14日	17.2*37.7	親しい藩士である安東七郎右衛門の病気を心配し見舞っている。
信頼					気心の知れた藩士を頼みに思う
16	重文	井伊直弼書状 三浦十左衛門宛	嘉永3年(1850年)2月21日	17.0*72.2	三浦十左衛門の江戸出府を待ち望んでいたが、転役により出府はなくなり、残念だと述べている。直弼にとって親しい藩士は、手紙でやりとりするよりも、身近にいる方が良かったことが分かる。
17	重文	井伊直弼書状 三浦十左衛門・大鳥居彦六宛	嘉永3年(1850年)11月11日	12.5*34.0	三浦十左衛門と大鳥居彦六に、「私の心底を承知しているから」と、家督相続の際に家老に出す直書の代作を依頼する。

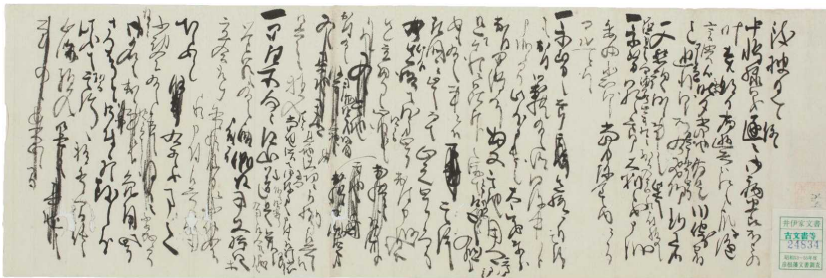
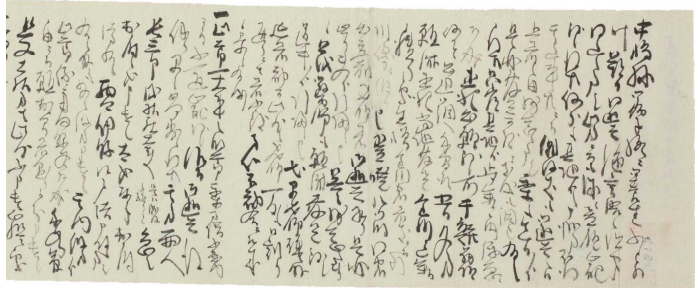
※7～9は個人蔵、それ以外は彦根城博物館蔵

写真解説

- 1 ^{い いなおすけしよじょう} 井伊直弼書状 ^{み うらじゆう ざい えもん おおとり い ひころくあて} 三浦十左衛門・大鳥居彦六宛 1点 【展示リスト1】
 縦12.5cm 横74.0cm 嘉永3年(1850年)10月9日
 当館蔵(彦根藩井伊家文書)
- 2 ^{い いなおすけしよじょうあん} 井伊直弼書状案 ^{きまた と きあて} 木俣土佐宛 1点 【展示リスト参考】
 縦12.0cm 横44.5cm 嘉永3年(1850年)10月6日
 当館蔵(彦根藩井伊家文書)

直弼の兄で井伊家12代当主の井伊直亮^{なおあき}が9月28日に彦根で亡くなった後に、1は、親しくしていた彦根藩士の三浦十左衛門・大鳥居彦六に宛てた直弼の手紙、2は家老の木俣土佐に宛てた職務上の手紙の下書きです。

1、2とも、冒頭で、直亮が亡くなった悲しみが書かれています。1では、「言語に絶する」「残念の至り」などの心情を表す言葉を何度も繰り返し、また、直亮の死去の報せを受けるまでの経過も書き綴っています。2では、同じことが簡潔な表現で記されており、親しい人へいかに詳細に書き送ったかが分かります(現代語訳参照)。このような詳細な書きぶりには、心の小さな動きまで書くことで、自分のことをしっかりと理解してもらいたいという直弼の思いが現れていると思われます。



【上】1 井伊直弼書状 三浦十左衛門・大鳥居彦六宛(部分)

【左】2 井伊直弼書状案 木俣土佐宛

【現代語訳】

1 井伊直弼書状 三浦十左衛門・大鳥居彦六宛

(直亮が亡くなり「言語に絶すること、昼夜心配していたこと、見舞いの使者の彦根到着が直亮が死去した当日になってしまい残念であること、直弼自身も彦根へ行くこととしたが重臣の反対や幕府との調整のために遅くなってしまったこと、ようやく10月5日に幕府から彦根へ帰る許可を得たことを述べて) すぐさま江戸を発足して、東海道神奈川宿まで参るつもりだったが、あいにく神奈川宿には差し支えがあるとして宿泊を断られ、手前の川崎宿に泊まりました。翌日の晩に同宿を出立する前に、飛脚が到着し、(直亮の)御逝去を聞き、どうしようもなく、そこより引き返しました。本当に残念の至りです。(後略)

2 井伊直弼書状案 木俣土佐宛

中将様(直亮)は終に御病養叶わず、去る朔日に御逝去遊ばされたことは、言語に絶することです。私は昨夕江戸を発足し、川崎宿まで急ぎ行きましたが、その甲斐なく、逝去を報せる飛脚が到着し、ひとお愁歎しました。(後略)

3 井伊直弼書状 長野義言宛 1点 【展示リスト3】
縦17.0cm 横73.0cm 天保13年(1842年)7月

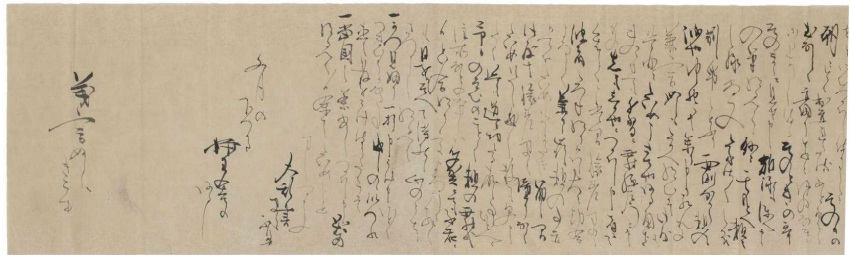
当館蔵(彦根藩井伊家文書)

4 井伊直弼書状 長野義言宛 1点 【展示リスト4】
縦17.1cm 横235.6cm 天保13年(1842年)11月

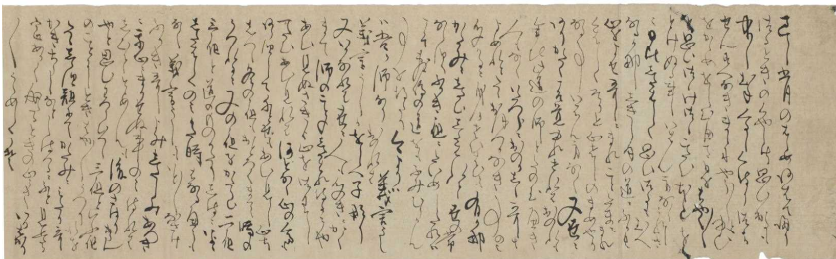
当館蔵(彦根藩井伊家文書)

天保13年5月2日、後に直弼の国学の師となる長野義言が近江国坂田郡志賀谷(現・米原市)に来ていることを知った直弼は、使いの者を遣わして呼び寄せようとしたのですが、ちょうど入れ違いで長野は出立してしまっていました。3は、その約2ヶ月半後に長野に送った手紙で、このような経過を記した上で、「本意なき(残念な)心地がし、そのときの歌をそのままお見せ申します」と、そのときの気持ちをが書き綴られています。このときは、添削を受ける目的もありましたが、和歌も利用して気持ちを伝えようとしていました(この和歌は現在見つかっていません)。

さらに約4ヶ月後の11月20日、直弼は長野と埋木舎で初対面を果たし、直弼と長野は3夜続けて語り合いました。4は、その後ほどなくして長野に送った手紙で、5月2日に会えず、その後もずっと会いたいと思っていたことを述べた上で、初対面を果たした喜びが書き綴られています。その後の余韻なども詳細に書かれており、2メートルを超える特に長大な手紙になっています。



【上】3 井伊直弼書状 長野義言宛 (部分)



【左】4 井伊直弼書状 長野義言宛 (部分)

【現代語訳】

3 井伊直弼書状 長野義言宛

(前略)先頃はせっかく近くまで参られましたのにも、あいにく障りがあり、封面に及ばず、口惜しく思います。去る卯月の月末ごろ、多賀社に聞き合わせましたところ、今四日五日ばかりも留まりますとのことでしたので、五月二日に、近習の者と志賀谷村(坂田郡)まで遣わして、無理にでも連れてきなさいと言いつけました。が、(長野は)その日の朝早くに出立してしまつたあとで、(近習の者は)むなしく立ち返り、ともに本意なき心地がし、そのときの和歌を、そのままお見せします。雑詠も添えます。入筆してください。(後略)

4 井伊直弼書状 長野義言宛

過ぎし五月のはじめ、(長野が)会わないで帰つてしまったときの悔しさ、思い出して胸が苦しくございます。なすべき手立てがないままに、だんだんと指を折つて、大切にすべき日を(過ぎし)、はやくはやくと思ひ続け、このたび本意を遂げたこと、言ひようもないほどうれしく、(後略)